（胸部外科）
○笠置　康・毛井　純一・村杉　雅秀・茅野　公明・曽根　康之・長柄　英男・和田　寿郎
（麻酔科）尾崎　真・藤田　昌雄

気管離断（外傷性）を緊急手術により救命し得た症例を経験したので報告する．

S.Y.(17歳男性)はオートバイ運転中に酒びんの中につっ込み，近医に救急車にて運びこまれた．前頸部に穿孔を認めこの部位より呼気が排出していた為，当科に転送となった．救急外来にて診察するに前頸部の孔は皮弁状となっており，皮弁を翻転し孔の内部を観察すると気管が膜様部を残して完全に離断していた．

経口にて声門をこえた挿管チューブを孔より導き離断遠位例の気管へと挿入した．全身麻酔下に胸骨正中切開を施行した．皮切を輪状軟骨の部位まで上方に延長し，甲状腺を狭部にて結紮切離して左右に開いた．第4と第5気管軟骨の間にて気管は離断しており，膜様部は離断部位より上方に第2気管軟骨まで裂けていた．また第5気管軟骨も挫滅していたので第2気管軟骨より第5気管軟骨までを切除し離断遠位側の気管を受動し端一端吻合をデキソン3—0系にて行なった．術後経過は良好で術後15日目に退院した．

9．悪性腫瘍肝転移における5′-Nucleotide phosphodiesterase-Vの腫瘍markerとしての意義
—他の腫瘍markerとの比較検討—

（外科）
○山本　和子・徳田　剛爾・窪田茂比古・城谷　典保・神戸　知充・神崎　正夫・小島幸次朗・大地　哲郎・木村　恒人・馬渕　原吾・鈴木　忠・倉光　秀麿・織畑　秀夫

原発性または転移性腫瘍早期発見における腫瘍マーカーとしては従来より，CEA, β_2-microgrobulin, ferritin, α-fetoprotein等が知られているが，最近，5′-nucleotide phosphodiesterase Isozyme-V, Ribonucleaseが注目されつつある．

我々の教室では，昭和57年2月より，8月までの悪性腫瘍患者において，上記6項目の腫瘍マーカーを測定し，肝転移の有無との関係を検討したので報告する．CEAはZ-zel法を用い，94例に対し109回の検索を行ない肝癌，乳癌，肝転移未確認例を除く58例において，6ng/ml以上例で実際に肝転移を認めたのは64.7%，以下では12.2%であり，消化管癌に限ると，6ng/ml以上では61.5%，以下では14.3%であった．β_2-MGでは91例に対し111回の検索を行ない，腎機能低下（クレアチニン2.0以上）肝転移未確認例を除く75例において2.0μg/l以上では45%以下で12.7%，消化管癌に限ると，以上では66.7%以下では18.5%に肝転移がみられた．ferritinでは41例に対して104回検索し，輸血例，貧血例，肝転移未確認例を除く56例において，250ng/ml以上では52.5%に，以下では18.2%で，消化管癌では，以上では63.6%，以下では12%に肝転移がみられた．R-Naseでは，82例について86回検索し腎機能低下例，膵炎，肝転移未確認例を除く51例において，160μ/ml以上では39.3%，以下では4.3%であり，消化管癌では各々，44.4%，7.7%であった．5′-NPD-Vでは，75例について88回検索し，黄疸例（ビリルビン2.0以上）肝転移未確認のものを除く35例について検索すると，陽性例では80.9%，偽陽性で50%陰性では15%であり，消化管癌では各々90%，33.3%，7.1%に肝転移がみられた．AFPについては85例，106回の検索を行なったが肝癌では75%，2.0ng/mlの高値を示したが，肝転移例では従来通り高値を示さなかった．肝転移の有無は，CT. echo angiography開腹術で確認した．

結語：5′-NPD-Vは肝転移の有無，早期発見に関して，他よりもっとも信頼できるマーカーであり，陰性例でも，CEA, β_2-MG, Ferritin等の組み合わせにより，転移を早期に知ることができると思われた．

10．内視鏡的に摘除し得た胆道内迷入回虫の1例

（消化器外科）
○金原　文英・梁　英樹・福井　博行・志村　紀子・立花　正史・増山　克・椋棒　豊・亀岡　信悟・由里　樹生・秋本　伸・浜野　恭一
（同内科）土岐　文武・大井　至

回虫は虫垂，憩室，胆管，膵管その他へ入り込むために機械的な閉塞や炎症をおこすことが知られている．

最近我々は，胆石症で胆嚢摘出術を受けて10年目に，右季肋部から背部にかけた仙痛発作を訴え，遺残結石などの疑いで検査中に，経静脈的胆管造影（DIC）検査で総胆管内に回虫を認め，さらに内視鏡的逆行性膵胆管造影（EPCG）検査において総胆管十二指腸瘻孔への回虫嵌入による機械的閉塞を認め，ただちに鉗子を用いて回虫を採取したところ症状の著しい改善を認めた症例を経験したので若干の考察を加え報告する．

11．HIPRT酵素と免疫細胞